慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産的及び不生産的なる語に就て（一）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.996(86)- 1014(104)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

dničestvo）――ナロドニキの思想――と呼ばれ後年の露西亞マルクス主義と對比せられる。

さてドブロリューボフは其の天稟の英才を以てし乍ら何等獨創的の思想を編むの暇なく夭折したけれども、彼の雄渾なる文筆的活動の功績は當時の社會運動史上省筆を許さゞるものがある。Masaryk は次の如く記して居る。「ドブロリューボフの文筆ドブロリューボフの現實主義的批判は一の政治上の武器となつた。實際上彼の批評の文字は行動に變化した、論敵の語を以てせば暴力的行動に變化した。」（註四）と。

私は進んで概ね叙上の急進的社會主義的傾向に類する第二の思潮、即ち露西亞の社會的並に精神的生活の歴史に於て虚無主義（Nihilism）の名で呼ばるゝ思想と其代表者ビツサレフに就ての概要を述べ樣と思ふ。

（註一）ドブロリューボフは一八三六年ニジニ・ノブゴロッドの僧侶の家に生れた。其街の神學校で教育され、後出でゝセント・ペテルスブルグの師範大學に學んだ。一八五四年兩親を失ひ其結果家計に窮したので彼は飜譯や個人教授なり以て僅かに一家糊口の資に供せねばならなかつた。一八五五年チエルニシエフスキイの知己を得彼から殆ど決定的の影響を受けた。同五六年「現代」（Sovremennik：誌上に批評家として認められ、爾來同誌編輯部の事業に盡瘁せるも一八六一年肺勞を病んで早逝した。

（註二）彼の文學批評中オストロフスキイ（Ostrovskii）の劇曲、ゴンチヤロフ（Gončarov）の「オブロオモフ」及びツルゲエネフ（Turgenev）の「其の前夜」等に關するものが特に著名であると言はれる。

（註三）Masaryk: The Spirit of Russia. Vol. II p. 23.

（註四）ibid. p. 24.

生産的及び不生産的なる語に就て（一）

榎本鑛治

「勞働消費、或は支出（labour, consumption, or expenditure）の何れに適用されると考へらるゝにせよ、生産的及び不生産的（productive and unproductive）なる二語の適當なる用法に就ては今日多數の經濟學者が其の見解を異にせるものであるが、思ふに是れ以上に異論多き二說を指摘することは難事であらう」とは、ジョン・スチュアート・ミルが其の著「經濟學上未定の諸問題」第三論の劈頭に叙述せる言である。（J. S. Mill, Essays on some unsettled Questions of Political Economy, 1874, 2nd. edit., p. 75.）勿論此の生産的及び不生産的なる語を區別することは、術語の問題に過ぎぬのであるけれども、而も之を滿足に解決するために努力することは甚だ重要なる次第である。何となれば多數の經濟學者は常に是等の術語に對したる觀念に於て一致する所がなかつたとは云へ、其の術語は一般に極めて重要なる觀念を表示するために用ひられたるものであり、又右の觀念を常に表示す可き術語の漠然たる用法に依て或る曖昧さが其の觀念自體の上に投ぜらるゝことは、あり得可きであるからである。更に新術語の紹介に對する衒學的抗議が繼續する限り、精神的及び政治的主題に於ける正確なる思索家は、彼等の觀念表現に就て甚だ貧弱なる語彙に制限せられざるを得ない。故に（イ）人類の熟知せる術語が思索の道具として最大可能に利用せられなければならぬと云ふこと、（ロ）一語が既に他語に依て充分表現せらるゝ或る觀念の記號として用ひらる可きものではないと云ふこと、及び（ハ）極めて重要なる觀念を表示す可き諸術語が比較的重要ならざるが如き觀念の表現として擅に用ひらる可きでないと云ふことの三事は、甚だ緊要なる次第である。

依て私は次にミルの見解に從て生産的及び不生産的なる語に就て、

生產的なる語の意義を尋ねることゝする。

二

ミルの所說に從へば生產的勞働及び生產的消費なる熟語は或る經濟學者が極めて自由に用ひて居るものである。即ち彼等は、何等か有用なる目的に役立つ總ての勞働、及び浪費に非ざる總ての消費（all labour which services any useful purpose—all consumption which is not waste）をば、夫々生產的勞働及び生產的消費と思考して、之を分類するのである。現にジョン・ラムゼイ・マッカロック（John Ramsay M'Culloch）氏は次の如く主張して居る。曰くバアスター夫人（Madame Pasta 即ち一八三〇年前後に於ける伊太利の歌劇役者にしてソプラノの名手として聞えしジュディッタ・ネグリ Guiditta Negri 夫人）の勞働も亦棉絲紡績工の勞働と同樣に生產的勞働と呼ばる可きものであると。

此の意義に用ふれば生產的及び不生產的なる語は不要である。何となれば一方に於て有用なる及び快適なる（useful and agreeable）と云ひ、又他方に於て無用なる及び價値なき（useless and worthless）と云ふ語は生產的及び不生產的なる語が此の場合に適用せらるゝ總ての觀念を表現するに甚だ充分であるからである。故に其の術語の斯る用法は、言語の目的を破壞するものである。

更に制限せられし意義に於て如上の語を用ふる經濟學者は、生產的若くは不生產的勞働を解して富を生產する勞働若くは富を生產せざる勞働（labour which is producive of wealth, or unproducive of wealth）となすのが常である。然らば富とは何ぞや、茲に於て生產的若くは不生產的なる語は、多くの經濟學者が富なる語に與へし各種の外延（different extension）に適應する曖昧の附加せらるゝと共に樣々の相違を來すのである。

三

例へば或る經濟學者に依れば富とは、人類の使用若くは享樂に役立つと共に交換價値を有する總ての物件（all things which tend to the use or enjoyment of mankind, and which possess exchangeable value）を云ふのである。但し此の最後の條項には除外例がある。即ち空氣の如き、日光の如き、又勞働若くは犧牲を用ひずして無限量に獲得せられ得可き他の凡ゆる物件（any other things which can be obtained in unlimited quantity without labour or sacrifice）の如きは、何れも除外せらるゝのである。加之勞働に依て生產せらるれども、市場に於て一定の價格を支配するに足る一般的評價（general estimation）に統制せられざるが如き總ての物件も亦然りである。

併し此の定義が說明せらるゝ場合に多くの人は、「人間の使用若くは享樂に役立つ總ての物件」（"all things which tend to the use or enjoyment of man"）を解釋して單に總ての物質的物件（all material things）を包含するに過ぎないと考へたのである。從て非物質的生產物は、彼等の拒んで富と考へなかつたものである。而して彼等に從へば非物質的生產物のみを產出す可き勞働若くは支出は、不生產的勞働及び不生產的支出たる特色を有するものもある。

之に對する答辯は、此の分類に從へば或る大工の自家の職業上に於ける勞働は生產的勞働であるけれども、同一個人の修業中に於ける勞働は不生產的勞働であると云ふことであつた。而も如上二種の何れの場合に於ても、明かに大工の勞働が生產的と是認せらる可きものに專ら役

立つたものである。即ち終極の結果より觀れば一方は、他方と共に等しく缺く可からざるものであつた。更に今若し如上の定義を採用したならば、吾々は、他國の職人の二倍の熟練ある職人を有する一國も他の事情にして等しとすれば他國よりも富裕に非ずと斷言せざるを得ない。勿論富の各成果及び富を欲求するための一切は、明かに前の國よりも後の國に於てより高き程度に所有せらるゝことであらう。

一體食用に供する爲に採用せらるゝ櫻坊一籠が富と呼ばれると同時に、富なる名稱が生產的勞働者と公認せらるゝ人々の習得的熟練（acquired skill 例へば如上の大工の修業中に於ける勞働の如き）に與へられぬと云ふが如き總ての分類は、純然たる專斷的區別であり、又分類と術語とを豫定す可き目的に役立たぬものである。

四

去れば凡ゆる困難に打勝つために或る經濟學者の有する意向は、其術語の表現す可き區別が眞に充分一定し、而も前者の何れよりも一層完全に專斷的にして、又本質上の根據の薄弱なるものたらしめんとするにあるやうである。即ち彼等は、勞働若くは支出の產出する生產物が支出する其の人の掌中に復歸するのでなければ、如何なる勞働にも又如何なる支出にも生產的なる名稱を許與しないであらう。例へば籬（マガキ）を作ること、及び溝を掘ることは、彼等の名付けて生產的勞働となす所であるけれども、夫等の作用は、唯だ生產物の破壞を保護することに依て間接に生產に役立つに過ぎない。併し彼等の主張する所に依れば私有財產の保護のために政府の被むる自然的諸費用は、不生產的に消費せらるゝのである。而もマッカロック氏の巧妙に指摘せるが如く、是等の費用は其の國富に對する關係に於て籬師や溝掘人の賃銀に全く類似するものである。唯だ其の相違する所は、即ち籬師や溝掘人に賃銀を支拂ふ農夫は其の結果生ずる生產の增加を受く可き人たるに反して、警察官と裁判官との費用を負擔する政府は、必然的結果として私有財產の保證より生ずる國富の增加を夫自身の國庫（its own Coffers）に取戻さないと云ふにある。

此の分類より生ずる幾多の奇怪と不適當とを指摘する時は際限がないであらう。吾々が富及び生產なる語を解するに、夫等の語が今日迄用ひられし最廣義を以てすると、將又最狹義を以てすることを問はず、何人と雖も道路、橋梁及び運河が顯著なる程度に於て、且甚だ直接的なる樣式に於て生產及び富の增加に貢獻することを否定しないであらう。如上の理論に從へば夫等の建造に使用せらるゝ勞働と金錢的資源（pecuniary resources）とは、若しも總ての土地占有者が法律上彼自身の田地を通過する丈けの道路若くは運河を建造しなければならぬとすれば生產的であると考へられやう。若しも此の代りに政府が道路を建造し、而も公的通行稅（public toll-free）を徵收して通行せしめるとすれば、其の勞働と支出とは如上の組織に於て明かに不生產的であらう。併し若しも政府或は個人の組合が道路を建設し、而も其の費用を償還するために通行稅を課すとすれば、吾々は如何にして右の經濟學者が生產的支出なる、名稱を其の經費（outlay）に與へ得可きや之を知らないのである。思ふに其の同一勞働及び費用は、若しも無償に與へらるとすれば、不生產的と呼ばる可きであるけれども、若しも之がために稅金（charge）が課せられるとすれば、生產的と呼ばれると云ふ結果になるであらう。

若し吾々の闡説する純然たる專斷的分類の右の結果が指摘されたとすれば、吾々の常に認める其の抗議に對する唯一の答辯は、即ち其の境界線は何處かに設けられなければならぬ、而して凡ゆる分類には粗ぼ同樣なる適合性を以て一種類にも又他種類にも包含せられ得可き中間の場合（intermediate cases）が存すると云ふことである。此の答辯は、充分正確なる又區別す可き知覺の缺乏（the want of a sufficiently accurate and discriminating perception）、詳言すれば一般に分類の場合に避け難き不正確は如何なる種類のものであり、又其の常に除外され得可き、否除外されざる可らざる不正確は他の如何なる種類のものなりやと云ふ知覺の缺乏せることを指示するが如く思はれるのである。

五

思ふに幾多の種類其物は、心意的に云へば完全に一定せるかも知れないが、其の何れに或る特定對象が屬するかを斷言することは、常に必ずしも容易ではあるまい。從て二種の何れに或る對象が置かる可きか確定せざる時は、若し其の分類が適當になされ、又適當に表現せらるるならば、其の不確定は唯だ事實に依存するに過ぎない。即ち何れの種類に其の對象が屬するかは不定である。何となれば其の對象は、或る種類の諸特性と他の種類の諸特性との何れをより多く所有するかゞ疑問であるからである。併し特性其物は、最も正確に限定され區別されるであらうし、又常に然かされなければならぬ。殊に現在の如き場合に於て然りとする。何となれば此の場合に何等か重要なることは、諸觀念の間に於ける區別に過ぎないからである。併し吾々は、總ての職業を二種類――即ち生産的の種類及び不生産的の種類――に區別し得なければならぬと云ふことが、決して特に重要ではないのである。

然るに分類は、單に便宜の事柄に過ぎないと云ふことが屢々云はれる。此の主張は、或る意義に於て如何にも尤もであるけれども、若し其の意義が次の如くであるならば然りではない。即ち其の意味する所に從へば最も適當なる分類とは、或る對象が甲の種類に屬するや、將又乙の種類に屬するやを極めて容易に斷言す可きものであると。

抑も分類を使用するは、諸事物間に存する區別の上に注意を確定するにある。而して最上の分類とは自然の中に存在する異種の對象を確定整齊す可き幾多の便宜は、如何なるものにもあれ、兎に角最も重要なる諸區別の上に確定せらるゝものである。故に生産的及び不生産的なる語の意義を確定するには吾々は、衆知の用法を餘り目立つ程に破壞せずに兩語の表現し得可き最も重要なる區別に就て兩語を有意義ならしめるやうに努めなければならぬ。

更に古き術語の使用のみに限定せられたる場合には出來得る限り、吾々は夫等の術語の古き聯想に抗爭する必要なき點に注意しなければならぬ。從て吾々は、出來得るならば夫等の術語に次の如き意義を與ふ可きである。即ち其の意義に依れば（イ）人々が常に夫等の術語を使用する各種の命題は、出來得る限り尙ほ眞理たり得やうし、又（ロ）夫等の術語の常に惹起す感情は、吾々が夫等の術語を充用せんと欲する事物に依て喚起せらる可きが如きものであらう。

依て吾々は、以下の研究の結果に於て是等の條件を結合することに努めやう。

扨て如何なる方法に於て經濟學者が生産的及び不生産的勞働若くは消費の定義を決定せるに

せよ、彼等が其の定義より推論したる結果は粗ぼ同一である。即ち一國の生產的勞働及び生產的消費の數量に比例して其の國が富裕となると云ふことは、彼等の總てが許容する所である。去れば不生產的勞働及び不生產的消費に比例して、其の國は貧困となるのである。又通常彼等の見解に依れば、生產的支出は一の利得(a gain)である。去れば不生產的支出は、如何に有用なるも一の犧牲(a sacrifice)と看做さるゝのである。更に彼等の見解に從へば、生產的に支出せらる可かりしものを不生產的に支出することは、常に資源の浪費(a squandering of resources)なる特色を有するものにして又浪費及び大ザッパ(profusion and prodigality)なる名稱が與へらるゝのである。之に反して資本を蠶食せずに不生產的に支出せらる可きものを生產的に支出することは、貯蓄とか、經濟とか、又は儉約とか(saving, economy, frugality)云ふのである。從て缺乏とか、困窮とか、又は飢餓とか(want, misery, and starvation)云ふものは、一國が其の生產に於ける勞働及び資源の使用を年々次第に減少せしむ可き運命を指すのである。斯く使用せらるゝ富の數量が年々增加する結果として、慰安と殷富(comfort and opulence)とは增殖せらるゝのである。

次に吾々は、支出と勞働使用とに於ける性質の如何なるものが、上述せる總ての結果を眞實に流出せしむ可きかを吟味しやう。

六

扨て總ての勞働及び總ての支出が差向けらるゝ目的は二樣である。(イ)其の一は、往々直接的享樂、即ち滿足其物が希望せらる可き諸欲求の充足(enjoyment immediately; the fulfilment of those desires, the gratification of which is wished for on its own account)であることがある。(ロ)其の二は、勞働若くは費用が享樂のために直接に(immediately)招かれず、而も尙ほ絕對に浪費せられざる場合には、何時にても其の勞働若くは費用が間接的享樂(enjoyment indirectly or mediately)の目的に招かる可きであることがある。即ち二者孰れにしても、享樂の永續的源泉(the permanent sources of enjoyment)を補償し、又永續せしめ、若くは之に附加する所がある。

勿論享樂の源泉は集積され貯藏されるであらうけれども、享樂其物は集積することも貯藏することも出來ない。抑も一國の富は、其の物質的たると非物質的たるとを問はず、其の國に包含せらるゝ享樂の永續的源泉の總額より成るのである。而して吾々の考ふる所に依れば、是等の永續的源泉を增加持續せしむ可き傾向ある勞働若くは支出は生產的と名付けらる可きものである。

次に直接に享樂を與へる目的に使用せらる可き勞働、例へば樂器の演奏者の勞働の如きは、吾々の名付けて不生產的勞働となすものである。吾々の考ふる所に依れば斯の如き演奏者の消費する總てのものは、不生產的に消費せらるゝのである。何となれば其の國民の占有する享樂源泉の集積總額は、其の演奏者の消費せる數量丈け減少するものなるに反して、若しも夫れが食物及び衣服の生產に於ける勤勞(services)との交換に與へられたとすれば、其の國に於ける享樂の永續的源泉の總額は減少せずして却て增加したであらうから。

然らば其の樂器の演奏者は、其の行爲に關する限り生產的勞働をなすに非ずして、不生產的勞働をなすものである。併し其の樂器の製作に

從事する勞働者の勞働に就て、吾々は何と云ふ可きであらうか。多數者の云ふ所に依れば、其の勞働者も亦生產的勞働者である。而して其の理由は如何と云ふに、樂器其物は享樂の永續的源泉にして、其の享樂と共に終始するものに非ざるが故に、集積せらると是認せらるゝからである。

併し其の音樂家の熟練(skill)も、亦享樂と彼の演奏する樂器との永續的源泉である。而して假令熟練其物は一個の物質的對象(a material object)に非ずして、對象の一性質、即ち演奏者の双手と心意との一性質(a quality of an object, viz., of the hand and mind of the performer)であるにしても、熟練は交換價値を有し勞働と資本とに依て獲得せられ、又貯藏集積せられ得るものである。故に熟練は富と考察されなければならぬ。而して人類の利益若くは快樂に役立つことに於ける熟練修得に使用せらるゝ勞働と諸基金(funds)とは、生產的に使用せられ、又費消せらるゝものと考察されなければならぬ。

又或る生產的勞働者の熟練は、彼の運轉する機械に類似するのである。而も熟練及び機械の二者は共に享樂でもなければ、又直接に享樂に役立つものでもないが、併し何れも享樂に役立つ點に於ては間接的であり、又同樣である。若しも多軸紡績機が富であるとすれば、紡績工の熟練も亦富である。又若し多軸紡績機を製作する機械師の勞働が生產的であるとすれば、其の紡績工が其の職業を修得せる場合の勞働も生產的である。而して兩者の消費せるものは生產的にして、詳言すれば既に消費せられし數量よりも遙かに多く享樂の永續的源泉の新たなる創造を生ずることに依て、其の消費は其の國に於ける夫等の源泉の總額を增加せしむるものに役立つこそすれ、毫も減少せしむるものではないのである。

更に例を代へて或る裁縫師の熟練と彼の使用する要具とは、同樣に甚だ間接なる方法にて衣服を著用する人に便宜を與へるものである。何となれば直接に貢獻するものは、衣服其物であるが故である。かのバスター夫人の熟練と、彼女の演技の效果を助くる建物及び裝飾とは、亦同じく何等の中間的手段なくして、即ち直接の方法にて聽衆の享樂に貢獻するものである。然るに其の建物及び裝飾は不生產的に消費せられ、又バアスター夫人は不生產的に勞働して、不生產的に消費するものである。何となれば其の建物は使用されて破損し、而してバアスター夫人は直接に觀客の享樂のために演技を行ひ且其の演技の結果として交換價値を有する永續的成果(any permanent result possessing exchangeable value)を一も殘さないからである。去れば不生產的なる形容詞は、煉瓦及び漆喰の漸次的消耗にも、劇場のより腐朽的なる諸性質(properties)の連夜の消費にも、演技中のバアスター夫人の勞働にも、將又其の場合に於ける合奏團の勞働にも、等しく適用せられなければならぬ。乍併之にも拘はらず其の劇場を建設せる建築技師は生產的勞働者であつたのである。同じく腐朽的物品の生產者も生產的勞働者にして、樂器の製作者も亦生產的勞働者であつた。而して更に吾々の附加す可きものには、斯る音樂を養成せる教師の勞働もあれば、又バアスター夫人に與へたと云つても宜い教授に依て同夫人の技倆を完成するに貢獻せる人々の勞働もあるのである。總て是等の人は、同樣に且甚だ間接なる方法、即ち享樂の永續的源泉の生產に依て聽衆の享樂に貢獻したるものである。

然らば此の場合と、既述の棉絲紡績工の場合とに於ける相違は如何と云ふに夫れは下の如くである。即ち多軸紡績機と棉絲紡績工の熟練とは生產的勞働の成果であるのみならず、又夫自體が生產的に消費せらるゝのである。之に反して樂器と音樂家の熟練とは、等しく生產的勞働の成果であるけれども、夫自體が不生產的に消費せらると云ふにあるのである。

然らば斯く論じ來りしミルは如何なる準則に基づきて生產的、不生產的の區別を試みたるや、次に之を窺ふことゝする。

七

（A）即ちミルの見解を以てすれば、次のものは常に生產的である。

（イ）其の直接の目的、若くは結果が人類に取て有用若くは快適なる或る物質的生產物（some material product）の創造にある所の勞働及び支出。

（ロ）其の直接の結果と目的とが人類に取て有用若くは快適なる諸能力、若くは諸性質（faculties or qualities）を人類又は他の生物に與へて、而も交換價値を有する所の勞働及び支出。

（ハ）其の直接の目的が何等か有用なる物質的生產物、若くは肉體的乃至心意的能力、或は性質（bodily or mental faculty or quality）を創造することに存せざれども、尙ほ夫等の目的の一を促進するに間接に役立つと共に其の目的のためにのみ行はれ、若くは求められると云ふが如き勞働及び支出。

（B）又次のものは半ば生產的にして、半ば不生產的である。而して其の何れの種類にも適當に分類され得ないものである。即ち或る有用なる物質的生產物、若くは肉體的乃至心意的能力或は性質を眞實に創造するか、又は之が創造を促進するものではあるけれども、併し其の目的のためにのみ求められたり、若くは行はれたりするのではなくして、他に恐らく主要なる目的、即ち享樂若くは享樂の促進と云ふ目的を有するが如き勞働及び支出。

是れである。

斯の如きものには、裁判官、立法者、警察官、軍人等の勞働、及び彼等の扶持のために求めらるゝ支出が屬するのである。是等の官吏は即ち一般人類が自己に屬するが如き物質的生產物若くは習得的能力を獨占する點に於て彼等人類を保護し保證するものである。彼等は斯の如く人類に保證を與へて彼等を扶持するに缺く可らざる費用に等しき以上の程度に於て間接に生產を增加させるものである。乍併是れのみが、彼等の存在す可き唯一の目的ではない。彼等が人類を保護するのは、單に人類の永續的源泉の所有に於てのみならず、又人類の樣々なる現實的享樂に於ても亦然りである。而も右の點までに於ては彼等は假令非常に有用であるとは云へ、吾々の提唱せんと欲する區別に從て生產的勞働者であるとは考へられ得ないのである。

其の他家內從者（即ち下男下女の類）の勞働及び賃銀（通常所謂給金）も亦之に屬するのである。是等の僕婢は、專ら單なる享樂に役立つものとして取扱はるゝのである。併し彼等の多數は屢々、又彼等の或る者は常に生產的本質ありと考へらるゝ勤勞をなすものである。例へば食物製造に於ける最終階段たる料理の勤勞の如き、又は農業の一部門たる園藝に於ける勤勞の如きである。

（C）右に反して次のものは全然不生產的である

（イ）直接に專ら享樂の目的を以て行はれ、又求めらるゝものなるも、併し其物質たると性質たるとに論なく享樂に終始するが如きもの以外に一物をも生ぜしめざる所の勞働及び支出、

（ロ）無益に、換言すれば純然たる浪費のために行はれ、又求めらるゝ以外に、直接の享樂も又享樂の永續的源泉をも生ぜざるが如き勞働及び支出、

併し純然たる享樂のために求めらるゝ支出と雖も、努力を鼓舞して間接に生産を促進するには非ずやと抗議せられ得るであらう。斯くてこそ高價なる建物の立派なる光景も、或る論者に從へば貧窮せる見物人の心意の上に同一の奢侈を享樂せんとの熱心なる欲求と、熱心に又勤勉に活動し、自己の收入より貯蓄して、自國の生産的資本（productive capital）を增殖せんとの必從的目的とを生ぜしむるものであると假定せらるゝのである。

沟に人類の大多數は、彼等の勞働及び集積の成果を晩年に到て消費せんとの欲求のみに依て、生産的勤勉（productive industry）を刺戟せらるゝのである。從て所謂不生産的消費は、享樂をば其の直接の結果とするものにして、實際は生産をば單に其の手段とする目的たるに過ぎない。而して其の目的を欲求する結果は、唯だ何人にも其の手段の利用を强ふることゝなるのである。

然るに之にも拘はらず、享樂を其の直接の目的とする勞働及び消費と、再生産を其の直接の目的とする勞働及び消費との間に於ける區別を指示することは、最も肝要である。即ち享樂を目的とする消費の光景は、單に之を知りさへすれば何等直接の見込もなく、充分に刺戟せらるゝが如き富に依て與へらるゝ享樂の欲求を尙ほ一層刺戟し得るものである。但し此の場合には假令多額の支出の實例が或る一人を刺戟して集積せしむるにしても、多額の支出の實例は更に他の二人を慫慂して大ザッパに支出させるものであると云ふ考察に就ては、全然留意せざるものである。尙ほ之にも拘はらず、若し吾々の期待する所が目論見たる諸結果のみであり、若くは直接に其の消費に隨伴し、而も其の消費との關係が判然と辿り得らるゝ結果のみであるとすれば、夫れは明かに一國に於ける享樂の永續的源泉をばより貧弱ならしむるものである。之に反して再生産的消費は、其の國に於ける享樂の永續的源泉をばより豐富ならしむるものである。加之若し單なる快樂の目的に費消せらるゝものが間接に富の增殖を促進するとすれば、夫れは單なる快樂に費消せざるやうに他人を誘ふ場合にのみあり得る事實である。

八

今本論を終るに先立ちてミルの附加へたる一個の觀察を述べなければならぬ。即ち不生産的勞働者を雇傭して費消するものゝ全部は必然的に不生産的に消費せらるゝものであると、假定す可らざること是れである。何となれば不生産的勞働者と雖も、彼等の賃銀の一部を節約して之を生産的事業に投資することもあり得るからである。

通常勞働者に支拂はるゝ賃銀は消費せらるゝ（consumed）ものと云はれるのである。何となれば其國に對する總ての利潤と損失とは、恰かも資本家の計算簿中に表示せらる可きであるかの如く考へるからである。去れば生産的勞働に支拂はるゝものは生産的に消費せらると云はれ、又不生産的勞働に支拂はるゝものは不生産的に消費せらると稱せらるゝのである。併し之を適

切に稱呼するには、支拂はれたる賃銀は生產的若くは不生產的に消費せらるゝと云はずして、生產的若くは不生產的に支出せらる（expended）と云ふ可きである。然らずんば吾々は「消費せらる」と云ふ言葉を二度繰返さゞるを得ないであらう。即ち例へば最初に不生產的に消費せらるゝと云ふならば、次に生產的に消費せらるゝと繰返すが如きである。

併し生產的及び不生產的の何れの方法に於て勞働者の賃銀は消費せらるゝやを斷言するためには、吾々は勞働者自身の掌中にある賃銀の跡を辿らなければならぬ。即ち生產的勞働者が自己の職業のために完全なる健康と適性とを維持するに必要なる丈けは、生產的に消費されると謂はれ得やう。更に又其の勞働者が生產的勤勉に適する年齡まで彼の子供を養育するために支出す可き金額を附加しなければならぬ。今若し勞働市場（the market for labour）の情況が彼に、より多額の賃銀を與ふるが如きであるとすれば、其の勞働者は其の餘剩賃銀を節約するか、若くは通常云はるゝ通り彼は之を浪費することも出來やう。從て若しも彼が餘剩賃銀の幾何額かを節約すれば、是れは――單に貯藏する場合以外に於ては――彼が生產的に使用せんと欲する賃銀にして、又夫れは生產的に消費せらるゝであらう。之に反して若しも彼が之を浪費するならば、其の消費は直接に享樂に資せらるゝが故に不生產的である。

更に右の事實は、既定の術語の訂正を暗示するものである。通常經濟學者は「純生產」（net produce 純收穫とも譯す）を定義して、一國の總年生產中より年々消費せらるゝ資本を償へる後に殘存する生產（that portion of the gross annual produce of a country which remains after replacing the capital annually consumed）を云ふとなすのである。而して彼等の說明する所に從へば、是れは利潤と賃子とより成るのである。又賃銀は、總年生產の他の部分、即ち資本を償ふ可き部分の中に包含せらるゝのである。此の定義に基づいて彼等の常に說く所に依れば、純生產のみは富を減少させずに不生產的に、即ち享樂のために擴大し得可きものとして、一國が其の資本を集積し得、又附加し得るための基金を構成するものである。然るに如上の二命題が共に眞理たり得ることは不可能である。即ち若しも純生產が資本を償へる後に殘存す可きものであるとすれば、純生產は資本を集積するための唯一の基金ではない。何となれば資本は賃銀からも集積せられ得るからである。是れこそ總ての國に於ける集積の一大源泉にして、恐らく米國の如き國に於ては集積の最大源泉であらう。他方に於て若しも集積又は不生產的消費のために利用せられ得可き基金を名付けるに、依然として純生產なる名稱を以てすることが望ましきならば、吾々は更に純生產を異樣に定義しなければならぬ。即ち通常の純生產に關する學說をば眞理ならしむるために採用せらるゝ最善の定義は思ふに次の如くであらう。曰く

「一國の純生產とは、原料及び要具の元本を毀損せずに維持し、凡ゆる生產的勞働者を生々と且作業に適する狀態に支持し、而して勞働者の人數を增加せずに正確に保持するに必要なるもの以上に、年々生產せらるゝ總てのものを云ふ」と。（The net produce of a country is whatever is annually produced beyond what is necessary for maintaining the stock of materials and implements unimpaired, for maintaining all productive labourers alive and in condition for work, and

for just keeping up their numbers without increase.)

而も其の國の生產的資源を支持するために要求せらるゝものは、大體に於て其の國民をばより貧困ならしめることに依て初めて其の豫定の目的より他の目的に轉せしめ得るのである。乍併之以上に生產せられし總てのものは、勞働者及び資本家の掌中に在ると將又他の如何なる種類の賃子所有者の掌中に在ると問はず、社會の生產的資源に對して何等の損害を與へずに直接の享樂のために供せらるゝであらう。而して斯る目的に供せられざる總ての部分こそ、國民的資本若くは享樂の永續的源泉（the national capital or the permanent sources of enjoyment）に對して明かに附加せらるゝものである。（J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 1874, 2nd edition, pp. 73-89）

以上はジョン・スチュアート・ミルが其の著「經濟學上未定の諸問題」第三論即ち「生產的及び不生產的なる語に就て中に論述したる見解の大要である。茲に於て右の見解は、彼が其の後幾何もなく一八四八年に公刊せる「經濟學原理」（Principles of Political Economy, with some of their applications of social philosophy, 1848）中の所說と相違する所ありや如何と云ふ問題が生ずるのである。依て次に私は其の「經濟學原理」中の所說を窺ひ、併せて前著との比較を試みることゝする。

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達（一）

津田誠一

一

彼は轉々延長して歇まざる鎖の如く此は其圓周を擴大し行く輪に似たり。"La Valeur d'après les Économistes Anglais et Français depuis Adam Smith et les Physiocrates jusqu'à nos Jours" の著者 Turgeon は、這般の比喩に託して英佛兩國の學界に現前せる價値論發達の經緯に關し、顯然たる對照の存する事實を指摘した（p. 365）。蓋し英吉利に於ては正統學派の客觀的價値論が Stanley Jevons 並に墺太利學派の主觀的價値論に其所を讓り、更に Alfred Marshall 一派が主觀客觀兩學說の融合調和を企劃する最近の傾向を醞釀するに至るまで前後一世紀を踰ゆる長日月に亘り、陸續接踵斯界に著聞せる幾多の巨擘は價値の眞因本態の那邊に存するやを模索して、或は勞働より生產費へ或は獲得の難易より最終效用へと逐次舊套を蟬脫して新衣に代へ、徐々に乍併着實に、綿々縷々盡くるを知らざる進化の狀況を展開し來れるに、翻て佛蘭西に於る價値論推移の跡を訊ねれば、後人は固より前人の所說を加減添削孜々內容の充實完備を遮幾せざりしにあらずと雖、尙且つ其根本の立脚地に至りては依然經濟科學樹立當初の傳統的見解を悠々墨守し敢て舊態を遺棄せんと欲する者稀であつた。然らば即ち此國の學徒は曠日彌久徒に同一地點を漫步したるの故を以て、當に緩怠の謗り迂遠の責を免れ得ざるものなる乎。あらず。寧ろ吾人の觀察を以てすれば彼等の先進は